松浦市文化財調査報告書 第9集

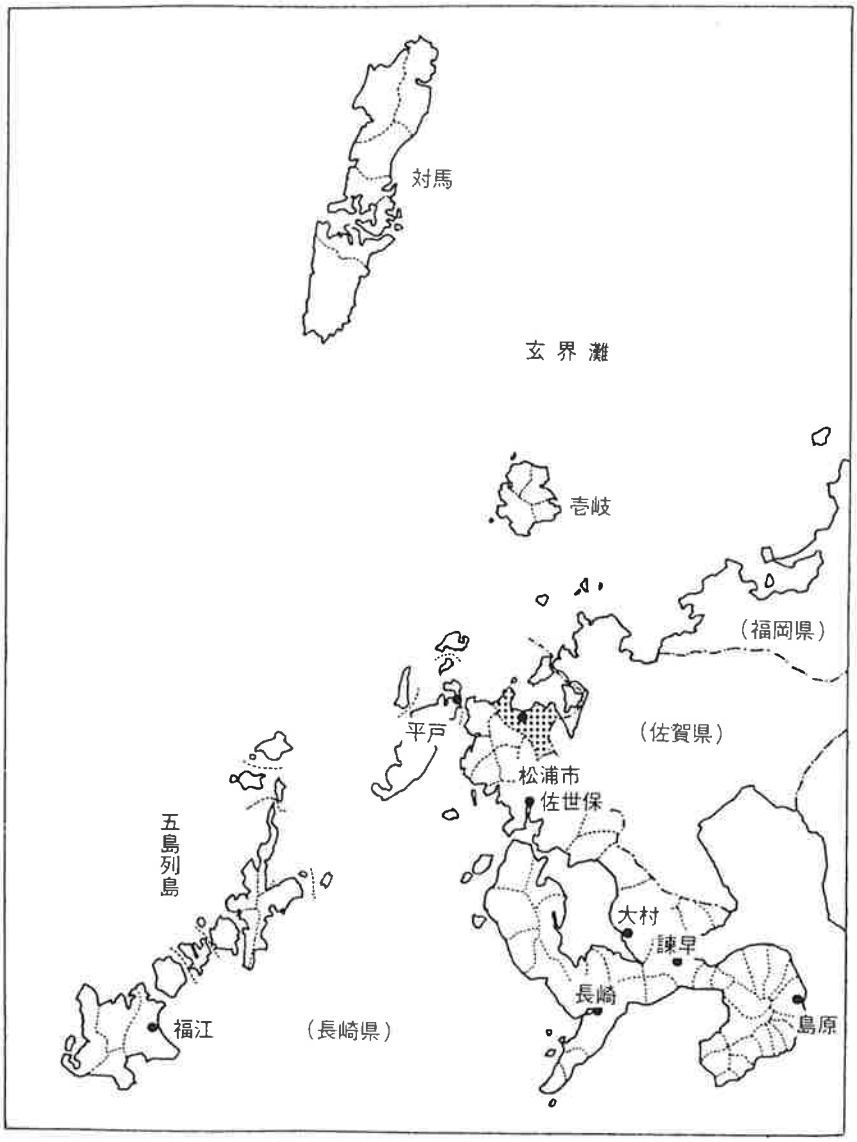
田　川　遺　跡

1991

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第９集

田　川　遺　跡



長崎県松浦市教育委員会

発刊にあたって

長崎県松浦市は，日本列島の西端に位置し，中国大陸や朝鮮半島とも近いという地理的条件もあり，古くから大陸との交流をうかがわせる遺跡も数多く知られております。

近年，本市においても各地で各種の開発事業が相継いで行われるにあたり，埋蔵文化財の保存が問題となっております。そこで教育委員会では，市内に埋蔵された数多くの文化遺産の保護を行うとともに，その保存に努力しております。

今回の調査は，竜尾川地区県営圃場整備に伴って，田川遺跡の範囲確認調査として実施したものです。その結果，旧石器時代・縄文時代の遺物包含層が確認されました。

今回の報告書は範囲確認調査の概要をまとめたものであり，決して満足のできるものではございませんが，学術研究に少しでも寄与でき，市民の皆様が埋蔵文化財に対する理解と認識を深め，さらに文化財保護の一助になれば幸いと存じます。

今回の調査に際しましては，関係者のご理解と，多くの方々のご参加を得て実施することができました。特にご協力をいただいた土地所有者の方々には種々の点でお世話になりました。心より深く感謝申し上げます。また，文化庁・長崎県教育委員会はじめ多くの人たちのご指導ご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成３年２月　　松浦市教育委員会

教育長　呼子俊一

例　　言

1．本書は，平成２年度に実施した竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う「田川遺跡」の範囲確認調査報告書である。

2．調査は，国庫および県費補助を受けて松浦市教育委員会が実施した。

3．調査にあたっては，県文化課・松浦市農林課の協力を受けた。

4．調査は，松浦市教育委員会社会教育課で実施し，社会教育主事中田敦之があたった。

5．本書の作成に関して，土器・石器の実測，写真撮影および報文執筆全て中田があたった。

6．調査によって出土した遺物は，松浦市教育委員会がその保管の任にあたっている。

7．本書は，松浦市文化財調査報告書第９集にあたる。

本　文　目　次

Ⅰ　は　じ　め　に…… 1
　1．調査に至る経過…… 1
　2．調査関係者…… 2
　3．田川遺跡の地理的・歴史的環境…… 3
Ⅱ　発掘調査の概要…… 7
　1．調査の経過…… 7
　2．土層と遺物…… 7
　3．遺　構…… 14
　4．その他の遺物…… 14
Ⅲ　ま　と　め…… 17

Ⅰ　は　じ　め　に

1．調査に至る経過

松浦市では，昭和60年度から県営圃場整備事業として志佐川地区が計画され，志佐川流域の柚木川内地区から里地区に及ぶ受益面積119 haの工事が着工されている。この地区には後者に宮ノ下（さが）り遺跡Ａ～Ｅの５遺跡の存在が確認されたが[註1]，Ｂ～Ｅの４遺跡については設計変更により盛土保存されているが，Ａ遺跡は設計変更が不可能な用排水路掘削部分について緊急調査を実施している[註2]。

さらに県営圃場整備事業は，昭和61年市西部の竜尾川地区でも計画され，長崎県県北振興局を通じて松浦市教育委員会に協議の申し入れがあった。計画地区内には長崎県遺跡地図52―47寺ノ尾Ｃ遺跡と52―45田川遺跡が周知されていたが，当教育委員会では，長崎県教育委員会の指導のもと，河川流域の詳細な分布調査を実施した後，県北振興局・松浦市農林課との協議を行った。その結果，遺跡の重要性を十分考慮したうえで埋蔵文化財包蔵地の詳細な試掘調査を実施し，遺跡の現状保存を行いながら，工法，事業費等との兼ね合いのなかで最小面積にとどめた発掘調査を実施してゆくことに快諾を得，これを基本方針として平成元年度より試掘調査を実施することに決定した。調査に際して，調査費は文化財側が国庫補助事業の一環として負担の責を担うものとし，元年度は寺ノ尾Ｃ遺跡と新たに分布調査で発見された田原積石塚（田原遺跡と名称変更）の範囲確認調査を実施した。その結果，寺ノ尾Ｃ遺跡では３地点で旧石器時代から弥生時代にかけての良好な包含層が確認された。また，田原積石塚では２基とも自然の礫を不規則に積み上げただけのもので，一般にいう古墳時代の積石塚ではなかったが，周辺の調査で弥生時代から古墳時代の包含層及び柱穴を検出することができた[註3]。平成２年度には本報告の田川遺跡の範囲確認調査を実施した。

平成２年度には，先の二者との間で数度にわたる協議を行った結果，お互いの立場を尊重して事業を推進してゆくことで合意がなされ，農政側も文化財の保護には極力留意しながら，その保存について詳細に検討して工事を進めてゆくこととし，かくして平成２年度から平成８年度の工事完成を予定に事業の着工をみるに至った。

平成２年度の当初事業施行に際しては，田原遺跡の保存について数度にわたる協議を行った。その結果，一部を除き盛土による設計変更にて回避することで合意がなされ，設計の変更が不可避な335 ㎡について本調査による記録保存措置を講ずることに決定し，県北振興局より当教育委員会に文化財保護法第57条の３第１項にもとずく発掘の通知が提出され，止むをえず８月から10月にかけて緊急調査を実施した[註4]。

註１　中田敦之　『宮ノ下り遺跡』　松浦市文化財調査報告書第５集　松浦市教育委員会　1989

註２　註１に同じ

註３　中田敦之『田原積石塚・寺ノ尾Ｃ遺跡』 松浦市文化財調査報告書第７集　松浦市教育委員会 1990

註４　1991年報告書刊行予定

２．調査関係者

田川遺跡範囲確認調査における発掘調査及び整理業務に従事した組織の構成は以下に記すとおりである。

調査主体	松浦市教育委員会	
調査担当	同	社会教育課指導係
総括	教育長	呼子　俊一
	教育次長	松尾　公平
	社会教育課長	石本　利明
庶務	同次長兼指導係長	網本　利光
調査	同社会教育主事	中田　敦之
調査協力者	長崎県教育委員会，長崎県県北振興局，松浦市農林課，竜尾川地区土地改良区	
土地所有者	冨野開，前田浪江，吉田日出男，松田和博，辻礼子，久住呂八郎，前田一義，大久保ウメ子，福守繁，福守富男，吉田ハル，西渓子	
発掘作業員	冨野開，横山泉，前田浪江，松田マサヨ，冨野トシエ，里森知恵子，天久保正子，吉田文代，前田重子，田中ミツノ，前田清子，辻礼子，松永セツエ，中川サエ子，村田政子，山口サエ，辻元エン，小浦良子，岡村ヒサノ，森山文代，立石トヨ子	
整理補助	長由美，江口鈴子，福田亮子，川畑絵美	

発掘調査を実施するにあたり，また，報告をまとめるにあたって，温かいご理解・ご協力をいただきました長崎県県北振興局・竜尾川地区土地改良区の関係各位におきましては，この場を借りて厚く御礼申し上げる次第であります。

3．田川遺跡の地理的・歴史的環境（第１～２図・表１）

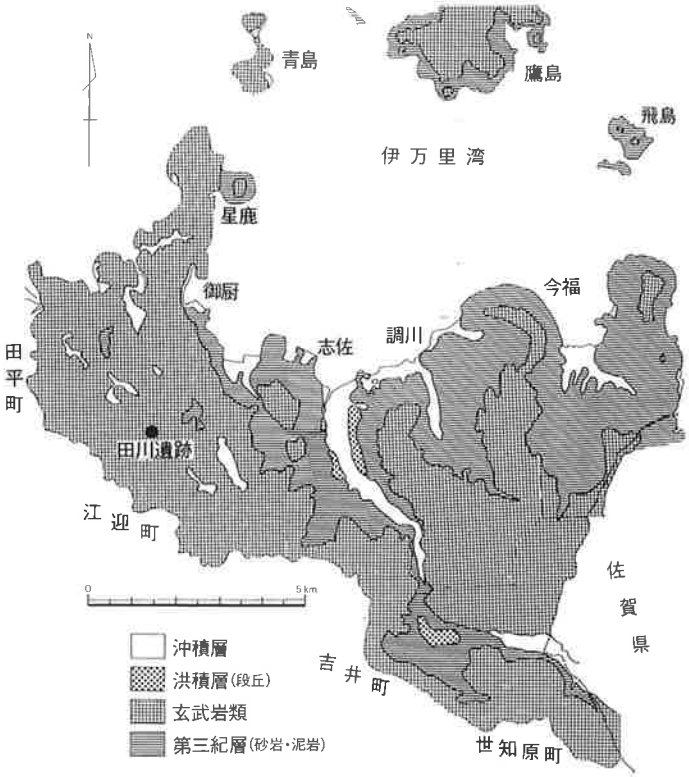
田川遺跡は，長崎県松浦市御厨町田代免字前田，島田，神林にあり，市の中心部から西方約4.5㎞に位置する。

田川遺跡が所在する松浦市は，第三紀層を基盤とし，その上に玄武岩が広く堆積している地質構造を呈しており，この玄武岩は北松浦半島を中心に西九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので，長崎・佐賀の県境を占拠する国見山系より流れ出た流動性の溶岩によって典型的な溶岩台地を形成している。市内でもいたる所に玄武岩の露頭が見られ，市北西部の海岸に顕著な柱状節理はその典型である。

本遺跡の立地する御厨町は市の西部にあり，玄武岩が不整合に覆っていたる所に低位の玄武岩が広く分布しており，白岳と大岳の二重構造の台地がビュート状に高まりをなしている。この低位の玄武岩台地は，竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位の台地となっている。中央部を流れる竜尾川は，北松浦郡江迎町境の白岳北麓に源を発し，木場川・田代川などの支流を集めて北流する延長約５㎞程の二級河川で，河口にはラッパ状に開いた三角江を形成している。

本遺跡の西側には，大岳（289.1ｍ）に源を発する大岳溜池があり，小河川を形成して遺跡を西から東へと流れて田代川と合流している。遺跡の三方は台地に囲まれ，水田・畑地が段階状に形成されており，盆地状を呈する所に営まれた遺跡である。北側には県道江迎・星鹿港線と市道相坂小船線が分岐しており交通の要所でもある。標高は約75ｍ～85ｍを呈している。

松浦市の西部地区には，黒曜石の原産地が点々と10箇所ほどある。それも星鹿半島一帯に分布しており，研究者の間では牟田産黒曜石として伊万里市の腰岳産黒曜石とともに良く知られている。このため市内の遺跡からは黒曜石を利用した石器とともに原石が出土することが良くある。黒曜石はガラス質で，その破片



第１図　松浦市内地質図

は切れ味が鋭く，細工がしやすいため，旧石器時代からすぐれた石材として使用している。旧石器時代ではナイフ形石器・台形石器等として，縄文時代では石鏃等として多量に利用している。このため田川遺跡を含む周辺一帯は原産地に近いという利点から市内でも遺跡の多い地域として注目されている。

旧石器時代では表採資料が多いが寺ノ尾C遺跡では包含層の検出ができている[註1]。しかし，原石採集地点での石器加工の問題は今後の発掘調査に期待される。

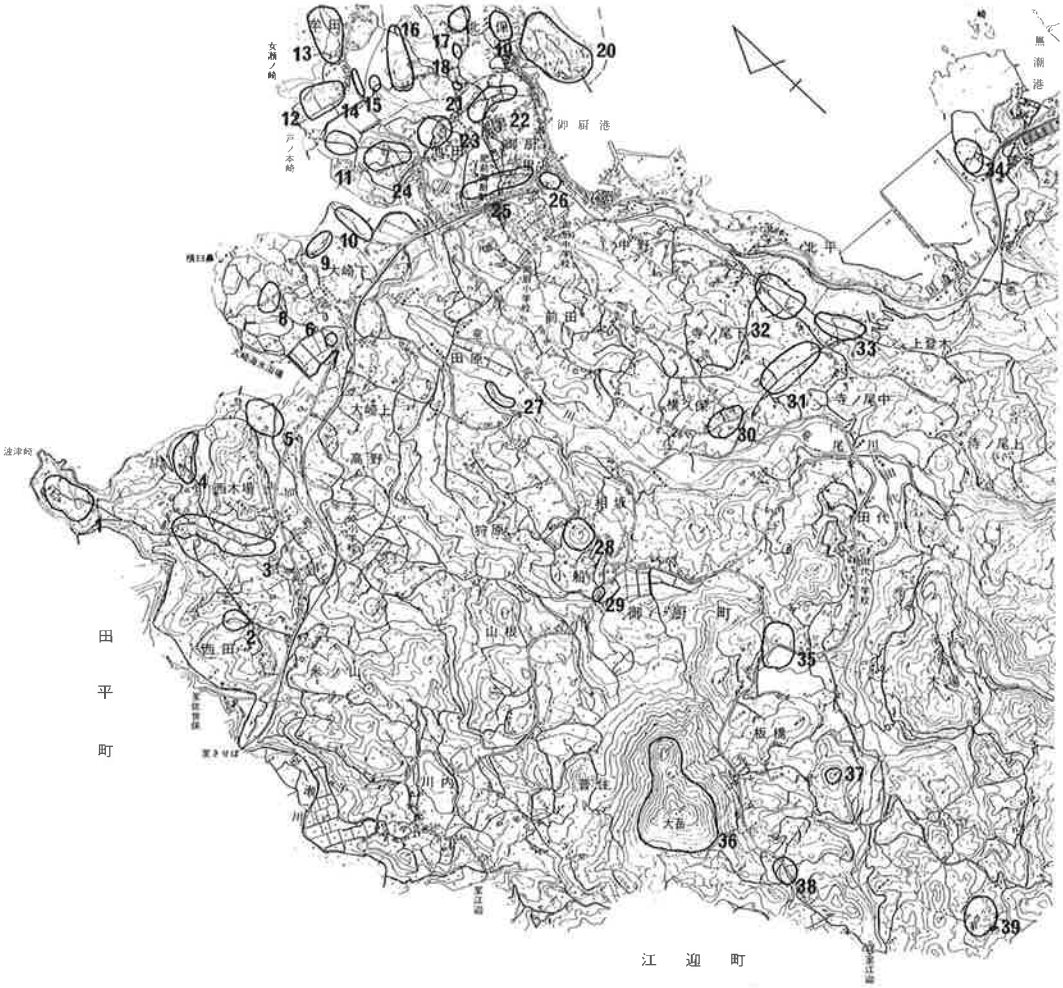
縄文時代では，姫神社遺跡・小嶋遺跡・池田遺跡など良好な遺跡が知られている。姫神社遺跡は昭和41年に朝鮮半島の東三洞貝塚から出土する櫛目文土器と九州の曽畑式土器との関連性の有無を主目的として日米合同調査が行われており，その一部が英文で報告されている[註2]。この論文については福岡県教育委員会水ノ江和同氏によって訳されている[註3]。同論文では姫式～轟式～曽畑式へと良好な層位に基づく土器編年が認められるとしており，石器では曽畑式期とそれ以前との間に大きな差異があると指摘している。遺跡からの出土遺物では表採資料を含めると塞ノ神式・轟式・曽畑式・並木式・阿高式など多種にわたっている。石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙・サイドブレイド・磨石・石皿・石錘などがある。調査面積は27㎡程度であったが，多数の牟田産黒曜石及び腰岳産黒曜石の剝片・石核が多数出土している。小嶋遺跡は昭和61年の簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡である。曽畑式・阿高式土器を中心に一部他地区からの搬入土器も出土している。石器では石鏃・剝片鏃・石銛・滑石製装飾品・石斧などがある[註4]。

弥生時代では，昭和63年・平成元年度に範囲確認調査を行った池田遺跡があげられる[註5]。同遺跡は縄文後期から弥生中期後葉の集落跡が中心で，柱穴，箱式石棺墓，甕棺墓，土壙などが検出されている。特に県北ではまれな貝塚の発見があった。貝層は厚さ約25～50㎝程ある黒褐色混貝層で，獣骨・魚骨などの自然遺物とともに骨製ヤス・貝輪なども出土している。

古墳時代では，昭和62年に範囲確認調査を実施した小嶋古墳群がある[註4]。古墳群は大崎海水浴場入口付近の標高6ｍ程の小さな丘に3基が営まれており，かつては，入江に浮ぶ小島であったようである。3基とも天井石を失ったり落ち込んだりの状況で盛土はすべて流出して石室が露出している。このうちの1基を調査した所，方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室で玄室内より銀環4個・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており，7世紀後半の終末期の古墳の形態をとどめている。その他の古墳では貴船神社古墳があげられる。提瓶1個と土師器の出土がある。また，池田遺跡からも田原遺跡からも須恵器等の出土があっている。

古墳時代から鎌倉時代にかけては，「宇野御厨」あるいは「宇野御厨荘」に関して述べる必要があろう。当松浦地方には御厨という地名が現在あり，今日へつながる御厨の地名はこの頃からの流れであろうと思われる。「御厨」という文字が最初に現われる文書は『東南院文書』で，寛治3年（1089）8月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とある。また，『石志文書』の康和4年（1101）8月29日の肥前国宇野御厨検校源久譲状案に「宇野御厨

野検校散位」とあり，松浦党の祖といわれる源久の名が見える。ただしこの文書は偽文書の疑いも指摘されている。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが，現在の伊万里湾西側地域から五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域の一帯であろうと考えられている。松浦党の一族は，一字名を名乗ることを特徴としておりそれぞれ割拠した本拠地の名称をもって姓としていることがあげられている。『青方文書』の永徳４年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には「ミくりや参川守守」，同年の『山代文書』には「ミくりや三河守守」，「ミくりやのさかもと源宥」の名が見える。さらに『青方文書』の嘉慶２年（1388）の一揆契諾状には「御厨三河守守」，「御厨田代近」の名が見える。この「田代近」という人物は，今回調査を行った田代地区を本拠地とした武士と思われ，居城としていた所が城ノ越城と考えられるが確証がなく今後の課題である。当地区には他に安倍宗任が築いたと伝わる大岳古墳があるがこれも充分明らかにされていない。この大岳の東側には板橋経塚があり，この地区一帯では原始・古代より生活の場として利用していたことが充分理解できる。



第２図　松浦市西部地区遺跡分布図（1/50,000）

註１．中田敦之 『田原積石塚・寺ノ尾Ｃ遺跡』 松浦市文化財調査報告書第７集 松浦市教育委員会 1990

註２．ALBERTMOHR AND MASAKAZU YOSIZAKI 「Cultual Sequence in Western Kyushu 『Asian perspectives』 XVI. 2 1973

註３．水ノ江和同訳 「西九州における文化の変遷」『古文化談叢第22集』 九州古文化研究会 1990

註４．中田敦之 『小嶋古墳群』 松浦市文化財調査報告書第４集 松浦市教育委員会 1988

註５．中田敦之 『池田遺跡』 松浦市文化財調査報告書第６集 松浦市教育委員会 1990

表１ 松浦市西部地区遺跡分布一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	遺跡地図番号	備考
1	波津崎	星鹿町西田免波津崎	剝片	52－14	
2	西木場	〃 西田免潮入	剝片	52－15	
3	田口高野	〃 西田免田口高野 〃 西木場免寺山	ナイフ形石器，石鏃，剝片	52－16	
4	田中	〃 西田免小田・田尻	スクレイパー，剝片	52－17	
5	下谷	〃 西木場免下谷	スクレイパー，剝片	52－18	
6	小嶋古墳群	〃 大崎免小嶋	銀環，勾玉，丸玉，鉄鏃	52－19	昭和62年調査
7	小嶋	〃 大崎免小嶋	縄文土器，石斧，石鏃，石銛		昭和61年調査
8	蕨川	〃 大崎免俵場	黒曜石原石	52－20	
9	水尻B	〃 大崎免水尻	ナイフ形石器，石斧，スクレイパー	52－21	
10	水尻A	〃 大崎免水尻	黒曜石原石	52－22	
11	戸ノ本崎	〃 牟田免池上	ナイフ形石器，石斧，石鏃		
12	佐世保崎	〃 牟田免佐世保崎	ナイフ形石器，台形石器，石鏃，黒曜石原石	52－24	昭和57年調査
13	牟田A	〃 牟田免中尾	ナイフ形石器，黒曜石原石	52－26	
14	牟田池上	〃 牟田免池上	石核，石鏃，黒曜石原石	52－25	昭和58年調査
15	北久保経塚	〃 北久保免竿	弥生土器，剝片		２基
16	牟田C	〃 北久保免藤園	ナイフ形石器，台形石器，掻器，石鏃	52－36	
17	北久保A	〃 北久保免勢ノ巣	石鏃，弥生土器	52－38	
18	北久保B	〃 北久保免浦頭	剝片	52－37	
19	北久保C	〃 北久保免浦頭	石鏃，剝片	52－39	
20	姫神社	〃 北久保免宮崎	縄文土器，石斧，石鏃，石鋸	52－40	昭和41年調査
21	貴船神社古墳	御厨町池田免田崎	須恵器		
22	池田	〃 御厨町池田免田崎 里免下長峯	縄文土器，弥生土器，石斧，石鏃，白磁，青磁，獣骨	52－41	昭和63年， 平成元年調査
23	長蔵坊	〃 池田免長蔵坊	ナイフ形石器，ラウンドスクレイパー，黒曜石原石	52－42	
24	中ノ崎	〃 池田免中ノ崎	ナイフ形石器，黒曜石原石	52－23	
25	坂本	〃 里免長峯	石鏃，黒曜石原石	52－43	
26	御厨城跡	〃 里免			
27	田原	〃 田原免	弥生土器，須恵器，石鏃		
28	城ノ越城跡	〃 小船免栗山			
29	葉山六地蔵塔	〃 小船免葉山		52－44	
30	横久保	〃 横久保免大久保	剝片，弥生土器	52－46	
31	寺ノ尾C	〃 上登木免天久保	ナイフ形石器，台形石器，石鏃	52－47	平成元年調査
32	寺ノ尾A	〃 上登木免大野谷	ナイフ形石器，台形石器，細石核，石鏃	52－48	
33	寺ノ尾B	〃 上登木免野中田	ナイフ形石器，台形石器，石鏃	52－49	
34	楼楷田	志佐町白浜免日前・楼楷田	ナイフ形石器，台形石器，縄文土器，弥生土器，青磁，白磁	52－50	
35	田川	御厨町田代免前田	台形石器，縄文土器，石鏃，剝片	52－45	本書
36	大岳古墨	〃 板橋免上場			
37	板橋経塚	〃 板橋免教塚		56－17	
38	板橋境目	〃 板橋免堺目	ナイフ形石器，石鏃，剝片	56－16	
39	アカニタ池	〃 板橋免アカニタ	ナイフ形石器，剝片，縄文土器	56－15	

Ⅱ　発掘調査の概要

1．調査の経過（第３図）

今回の田川遺跡の範囲確認調査は，市教育委員会と土地所有者（12名）と調査への協力及び目的・調査日程等について説明会を開き承諾が得られたので，稲の収穫が終了した平成２年11月６日から12月13日までのべ38日間行った。その結果，縄文時代の重要な遺跡であると確認された。

調査は第３図のように北側部分から開始し，南側へと移動して行い35箇所の調査区を設定した。２ｍ×３ｍのトレンチ13箇所，２ｍ×２ｍのトレンチ21箇所（31トレンチは２ｍ×2.6ｍ）を設定し，167.2㎡を発掘調査した。その結果，３地点（８箇所）において遺物包含層が確認され，旧石器時代の石器・縄文時代の石器・土器が出土した。なお，２・20・24・30・34の５箇所のトレンチからは遺物が出土しなかったが，その他のトレンチからは合計1,051点の遺物が出土している。しかし，遺物は広範囲に分布しているが鍵層が認められず，出土量も少ないため不明な部分が多い。

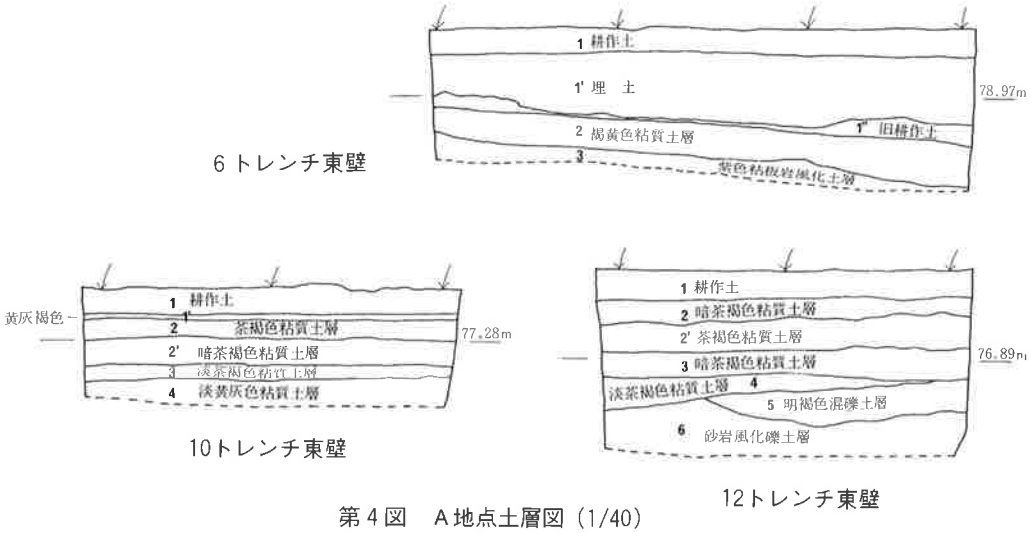
2．土層と遺物（第４図～第11図）

調査によって３地点で遺物包含層が確認されている。ここでは県道をはさんで北側地区をＡ地点，南側地区をＢ・Ｃ地点として区別する。

Ａ地点は，北から南へ低くなった緩斜面の水田部の標高約79ｍ付近に位置している。中央部の４・６・９トレンチは比較的浅い所で地山層が確認できたが，東と西では泥炭層が堆積しており小規模の谷状を形成していたものと思われる。しかし，８・10・12トレンチにて縄文時代の包含層を確認することができた。

1は幅広の不定形黒曜石製剥片を素材として，バルブ部分近くを除去している台形石器である。両側縁には裏面より細調整を施している。10トレンチ３層出土。**2**は安山岩製の尖頭器で下端を欠損するものである。全体の剥離は表裏より押圧剥離で丁寧に行われ，やや細身の形状を呈するものと考えられる。断面はレンズ状に薄く仕上げ尖頭器としての機能が高められている。12トレンチ３層出土。**3～6**は黒曜石製石鏃である。**4**の完形品を除くとすべてに欠損部分がある。**3**は先端部と脚を，**5**は半分を，**6**は両脚を欠損している。**3**は８トレンチ３層出土。**4**は10トレンチ２層出土。**5**は12トレンチ３層出土。**6**は８トレンチ４層出土。**7**・**8**は５トレンチ出土。**7**は鉄砲玉である。鉛玉で直径1.27㎝，重さ8.4ｇを測る。２層出土。**8**は３層から出土した李朝粉青沙器で，内外面に白土で象嵌が描かれている。胎土は灰色で，釉は淡緑灰色を呈する。**9**は龍泉窯系青磁碗で，外面に蓮弁文を有している。胎土は灰白色，釉は茶色味を帯びた緑色を呈する。８トレンチ３層出土。**10**は明染付皿でいわゆる「碁笥底」を

第３図　田川遺跡調査区設定図（1/3,000）



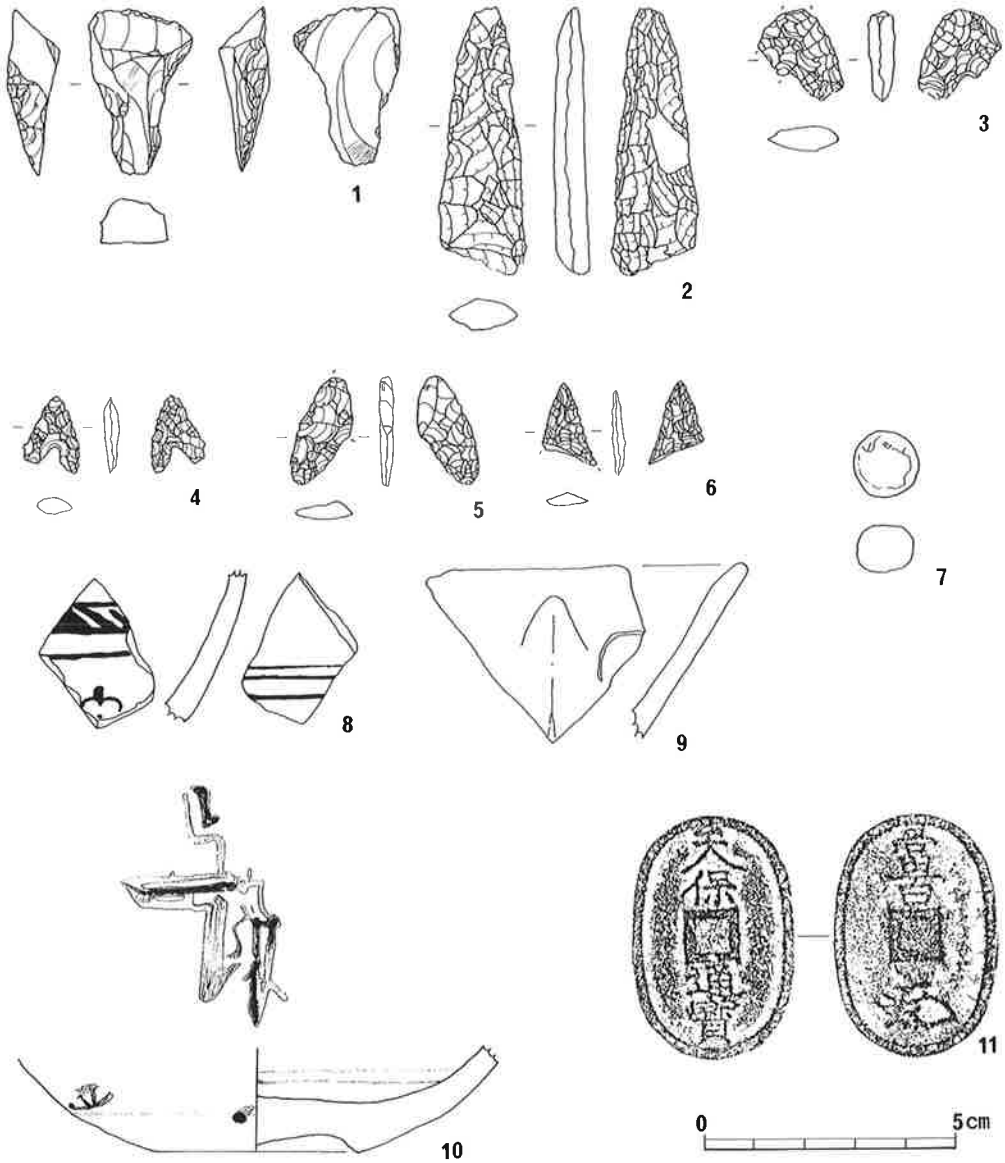
第４図　Ａ地点土層図（1/40）

呈している。外面には略化した文字の文様を，見込みには２条の圏線内に文字を描いている。胎土は黄白色を呈しており，15世紀後半～16世紀中頃の資料である。小野氏分類のＣ群にあたる。10トレンチ２層出土。**11**は銭貨の天保通寶で，天保６年（1835）100文通用のものである。10トレンチ２層出土。

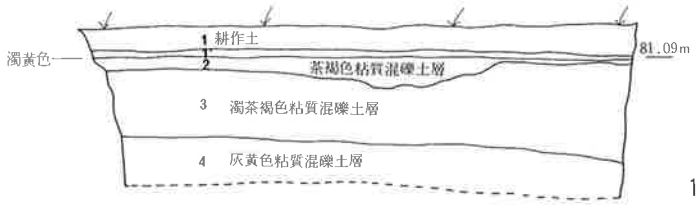
Ｂ地点は，Ｃ地点より西へ約100ｍの標高約81ｍ付近の18トレンチ周辺に分布している。薄い耕作土と床土の濁黄色粘質土があり，下に２層の茶褐色粘質混礫層がトレンチ中央部に比較的厚く堆積している。この層より336点の遺物が出土し，そのうち233点の黒曜石製剝片・砕片があった。黒曜石製石鏃は７点，縄文土器は37点であった。土器は図示できる資料が少なく３点をあげた。３層は濁茶褐色粘質混礫層で礫の中には火を受けて黒変しているものもあった。遺物は321点が出土している。そのうち黒色黒曜石製剝片・砕片は275点あった。縄文土器は22点である。

12～25は２層出土。**26～34**は３層出土である。**12～19**は黒曜石製石鏃で，側縁の形が直線的な**12**，基部が丸味をもち下方に外湾する**13**，基部が若干弓なりに内湾する**14**，基部を欠損する**15・16**，剝片鏃の**17～19**に区分することができる。剝片鏃は側縁加工を施す**18・19**と施さない**17**とに区別することができる。 **20～22**は21点の使用痕ある剝片から３点を上げた。 **23**は安山岩製スクレイパーで，表面に側縁部より粗い２次加工が施されている。**24**は胎土に多量の滑石を含み，明茶褐色を呈する底部で若干張り出している阿高式系土器である。このほかに胎土中に多量の滑石を混入する無文の胴部片30点と混入していない６点の無文胴部片があった。**25**は李朝象嵌青磁で内面に白・黒土による象嵌が施されている。胎土は灰白色で，釉は淡緑色を呈する。図示していない資料では龍泉窯系青磁碗の高台片が１点と白磁碗口縁部片があった。

26～28は黒曜石製の剝片鏃である。**26**は側縁加工を施している。**29**は剝片鏃とともに注視さ

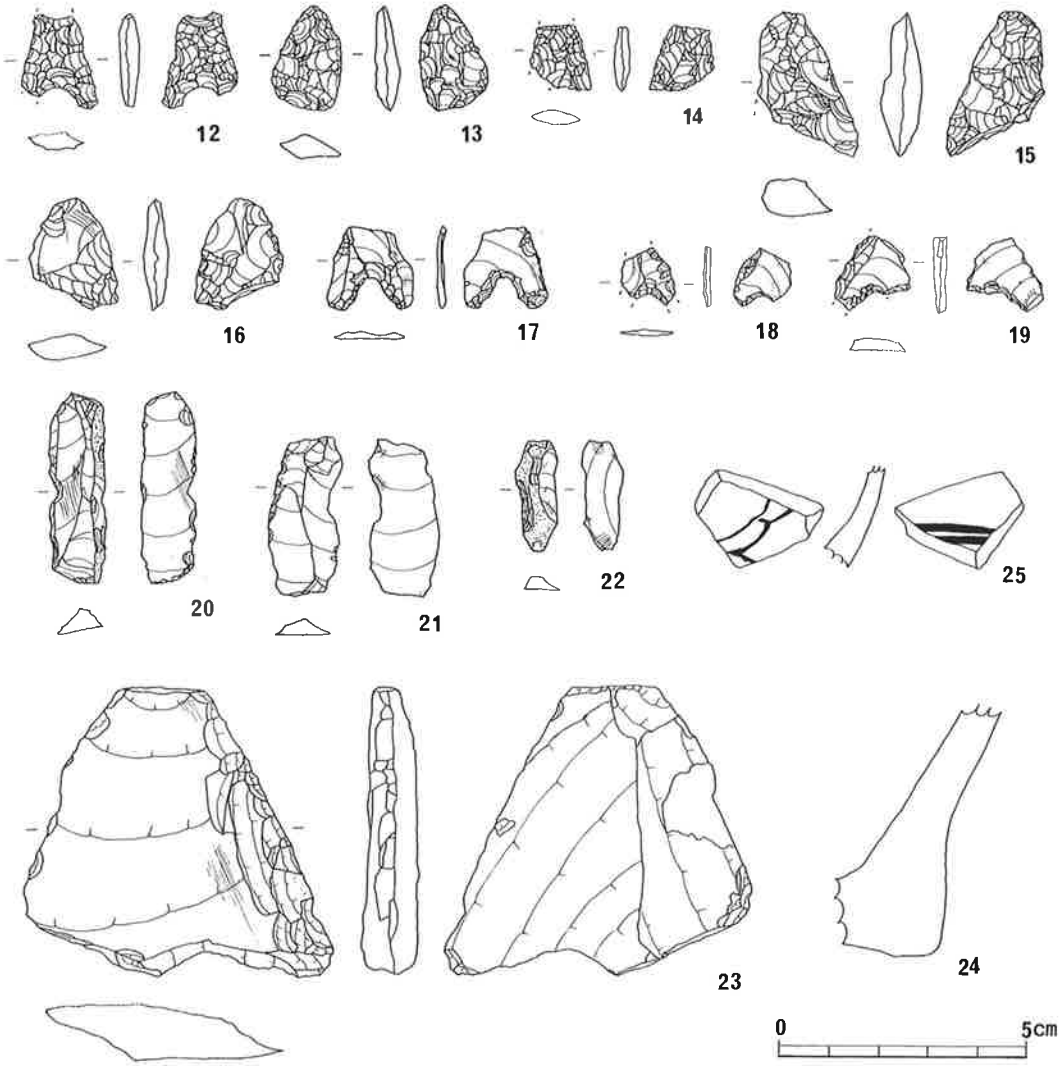


第５図　Ａ地点出土遺物（2/3）



18トレンチ東壁

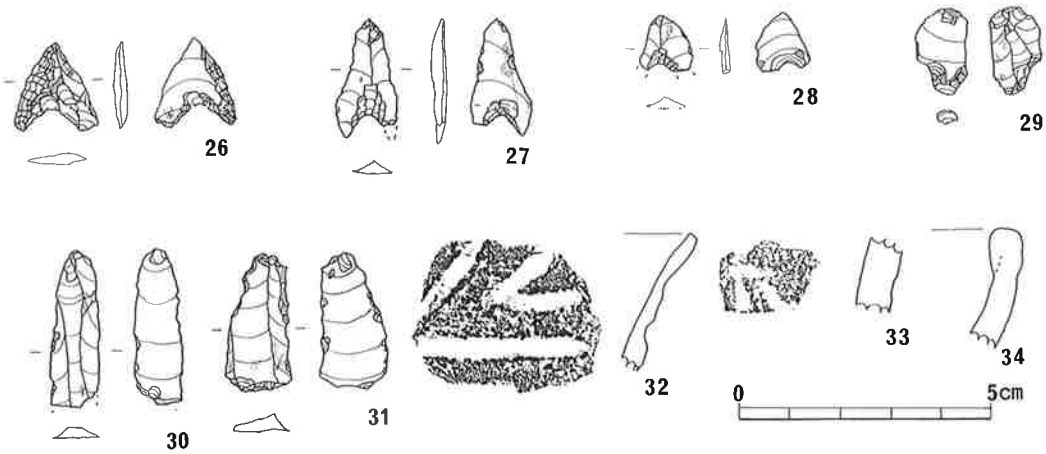
第６図　Ｂ地点土層図（1/40）



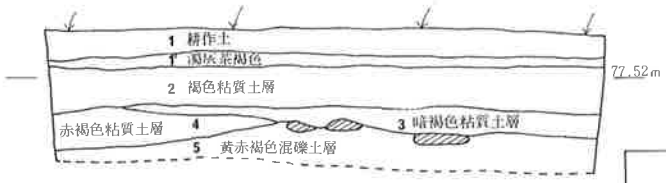
第７図　Ｂ地点出土遺物（2/3）

れているつまみ形石器である。打面部付近で折り，折断面は楕円形状を呈する。**30・31**は７点の使用痕ある剝片から２点を上げた。**32・33**は胎土に多量の滑石を含んだ阿高式系土器である。棒状原体によって凹文を施している。ほかに図示していない４点がある。**34**は黒褐色を呈し，口縁端部を肥厚させ，胎土に小さな滑石を混入させている。

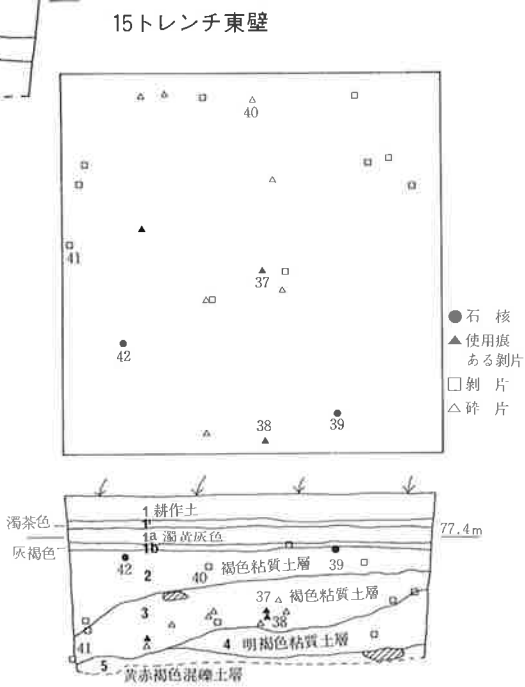
Ｃ地点は，調査範囲のほぼ中央の標高約80ｍ付近の西から東へ傾斜している舌状台地の先端部に位置している。34・27トレンチでは耕作土下に泥炭層が厚く堆積しており，また南側の23・32・33トレンチでも同様な状況であったため北側からＣ地点東側にかけてと南側は浅い谷



第８図　Ｂ地点出土遺物（2/3）



第９図　Ｃ地点土層図（1/40）

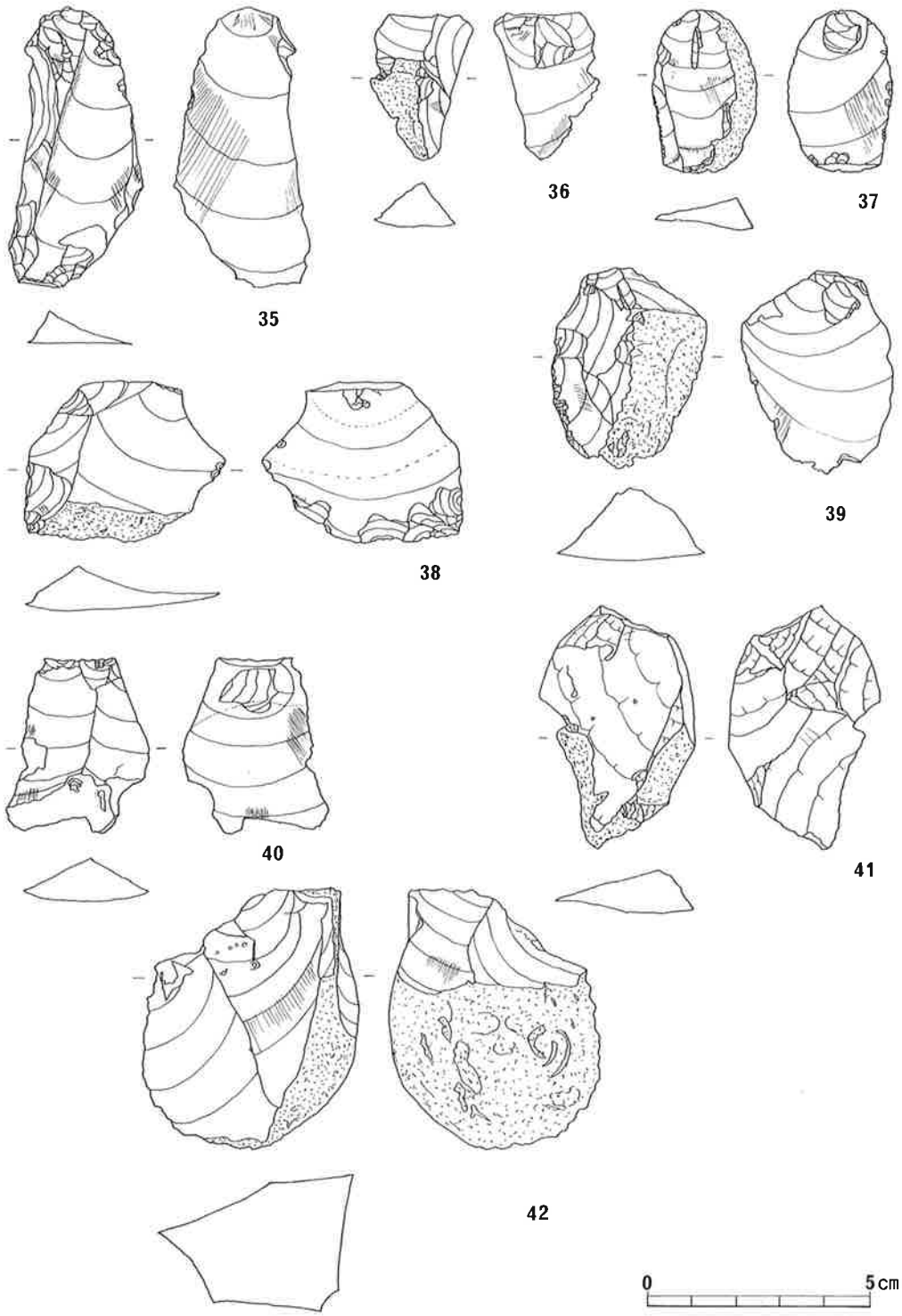


第10図　17トレンチ遺物分布図（1/40）

状地を形成していたと考えられる。この浅い谷状地形の続きが30・31トレンチでも確認できている。現在ではＢ・Ｃ地点の南側には大岳溜池からの小河川が西から東へかけて流れ田代川に注いでいるが、古くは数本が流れていたものと考えられる。このＣ地点はＡ地点に比べると15・17トレンチ周辺の狭い範囲に分布している。特に14・17トレンチでは時期が不明であるが各１基の落ち込みを検出することができた。

Ｃ地点の土層状況は，耕作土と床土の下に中世期ではないかと思われる灰褐色で黒色斑点を含んだ土層があり，３個の柱穴が15トレンチで検出できている。２層である褐色粘質土層は15～17トレンチで，地山を形成する玄武岩風化礫を含む赤褐色混礫土層は14・15・17と地形にそって傾斜をしながら16トレンチへと続いている。

Ｃ地点は，耕作土内から近世陶磁器類が出土しているが，２層からは土器を伴わない石器群で構成されている。15トレンチからはすべて２層から出土しており，**35・36**を上げた。**37～42**



第11図　C地点出土遺物（2/3）

は17トレンチ内出土で，**39・40・42**は２層，**37・38・41**は３層出土である。石材は**41**の安山岩製を除くすべてが良質の黒色黒曜石製である。**35**は縦長剝片を利用した使用痕のある剝片で右側縁に使用痕がある。**36**は表面に一部自然面を残している寸づまりの剝片である。**37**も表面に自然面を有する側縁に微細な使用痕を有する剝片で下端部を折断している。**38**は幅広の不定形剝片で表面に自然面を残しており，裏面下端部には調整痕がある。**39**は石核で左側縁から正面部分に剝片剝離を行っており，小形の寸づまりの幅広剝片を剝離している。**40**は寸づまりの不定形剝片である。**41**も剝片である。**42**は拳大よりやや小さめの円礫を素材とする石核である。打面を形成した後，自然面を有する剝片を３面剝いだもので，加撃角度は直角に近い。しかし何らかの理由で目的剝片剝離を断念している。以上，17トレンチ出土遺物の中には定形石器が１点も含まれていないため所属時期が不明確である。しかし，剝片，石核等から判断すると寸づまりの幅広剝片が多く存在しているところから，ある一定の短期間に利用された遺跡であると考えられる。

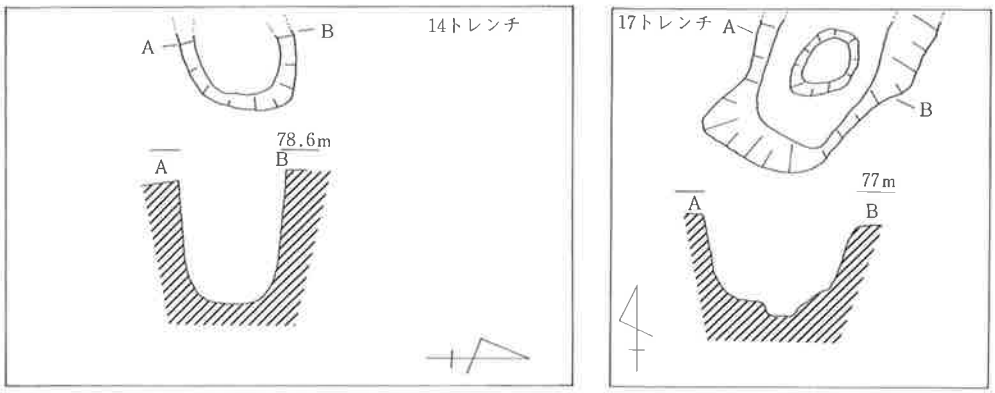
３．遺構（第12図）

35箇所の調査区において遺構が検出できたのは14・17トレンチの２箇所である。いずれも時期・用途については出土遺物もないため不明な点がある。14トレンチでは調査区の西側壁に落ち込みを１基検出した。円形か楕円形状を呈すると思われ，上面で径60㎝程ある。覆土は褐色粘質土層で，地山である黄赤褐色玄武岩風化礫層に深さ70㎝程掘り込んでいる。壁面はほぼ垂直にしている。一方，17トレンチの北側で落ち込みを検出した。遺構上面で短径90㎝，長径120＋α㎝あり，形状は長方形状を呈すると思われる。14トレンチ同様地山層に４層上面から２段に50㎝程掘り込んでいる。覆土は褐黄色混礫土層と暗褐色粘質土層であった。これらの遺構は落とし穴的な用途が考えられるのではないか。

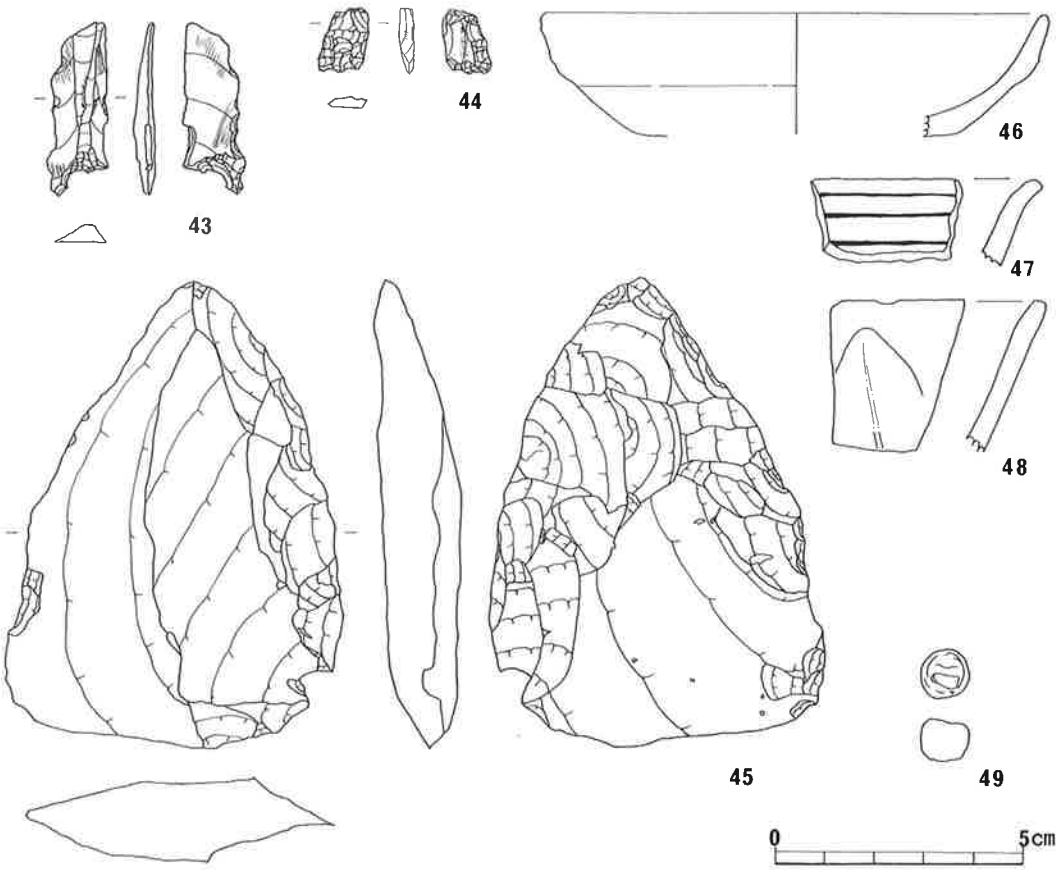
４．その他の遺物（第13図）

43から**49**までは表採・耕作土・埋土出土遺物である。**43**は黒曜石製縦長剝片の刃器を素材とし，末端部を先端として利用している剝片鏃で，脚の一部を欠損している。抉りの部分も深くスマートに仕上げてある。Ｂ地点表採。**44**は13トレンチ耕作土出土の黒曜石製石鏃片である。**45**は安山岩製スクレイパーである。表裏面共に側縁部より粗い２次加工が施されている。16トレンチ耕作土出土。**46**は土師器皿で糸切りの痕が若干認められる。体部中位から口縁部にかけてやや肥厚になっている。21トレンチ埋土出土。**47**は６トレンチ埋土の李朝粉青沙器である。**48・49**は26トレンチ埋土出土。**48**は龍泉窯系青磁碗で外面体部には鎬蓮弁文を有している。淡緑色の釉が全体に薄くかけられている。13世紀中頃～14世紀中頃の資料で，横田・森田分類のⅠ―５ｂ類にあたる。**49**は鉄砲玉である。鉛玉で直径0.99㎝，重さ3.8ｇを測る。上下合わせの鋳型で製造されたものと思われ，玉の中央部に接合線がめぐる。図示していないが，Ｂ地

点表採資料中に黒色黒曜石製石核１点がある。この資料は両端に打面を設け，上下から剝片剝離を行っており，両設打面石核として捉えられる。13トレンチ埋土よりつまみ形石器１点がある。黒色黒曜石製剝片を利用しており，平坦面と加撃面が残され，つまみの部分は両側から剝離され作り出しているが，つまみの部分を欠損している。



第12図　遺構実測図（1/40）



第13図　その他の遺物（2/3）

表２　遺物計測表

図版番号	石器番号	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	備　考
1	T10－3層	台形石器	黒色黒曜石	3.3	2.09	1.0	5.31	
2	T12－3層	尖頭器	安山岩	5.35	1.78	0.74	6.902	
3	T 8 －3層	石鏃	黒色黒曜石	1.82	1.7	0.45	1.295	
4	T10－2層	〃	〃	1.56	1.13	0.36	0.405	
5	T12－3層	〃	〃	2.24	1.27	0.31	0.605	
6	T 8 －4層	〃	〃	1.7	1.1	0.27	0.305	
7	T 5 －2層	鉄砲玉		1.27	1.26	1.05	8.4	鉛製
12	T18－2層	石鏃	黒色黒曜石	1.9	1.55	0.42	1.005	
13	〃	〃	〃	2.18	1.39	0.57	1.509	
14	〃	〃	〃	1.38	1.21	0.31	0.505	
15	〃	〃	〃	2.9	1.97	0.87	3.305	
16	〃	〃	〃	2.25	1.8	0.54	1.8	
17	〃	剥片鏃	〃	1.64	1.71	0.19	0.59	
18	〃	〃	〃	1.22	1.08	0.2	0.205	
19	〃	〃	〃	1.55	1.55	0.3	0.6	
20	〃	使用痕ある剥片	〃	3.85	1.14	0.61	2.48	
21	〃	〃	〃	3.19	1.41	0.4	1.6	
22	〃	〃	〃	2.23	0.88	0.33	0.66	
23	〃	スクレイパー	安山岩	5.89	6.24	1.14	43.101	
26	T18－3層	剥片鏃	黒色黒曜石	1.78	1.66	0.27	4.01	
27	〃	〃	〃	2.4	1.26	0.29	0.49	
28	〃	〃	〃	1.17	1.12	0.23	0.202	
29	〃	つまみ形石器	〃	1.71	1.02	0.24	0.495	
30	〃	使用痕ある剥片	〃	3.1	1.01	0.29	0.98	
31	〃	〃	〃	2.73	1.33	0.41	1.3	
35	T 15 － 20	〃	〃	6.32	3.05	1.1	13.2	
36	T 15 － 6	剥片	〃	3.36	2.3	0.95	5.15	
43	B地点表採	剥片鏃	〃	3.54	1.27	0.44	1.5	
44	T13耕作土	石鏃	〃	1.3	1.0	0.28	0.45	
45	T16耕作土	スクレイパー	安山岩	9.43	6.75	1.8	98.5	
49	T 26 埋土	鉄砲玉		0.99	0.98	0.9	3.8	鉛製

表３　17トレンチ石器計測表

図版番号	石器番号	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	標高(m)
42	T17－1	石核	黒色黒曜石	5.8	4.75	3.1	107.5	77.32
	2	砕片	〃	1.15	1.26	0.7	0.8	77.017
38	3	使用痕ある剥片	〃	3.65	4.5	1.0	14.9	76.992
39	4	石核	〃	4.6	3.45	1.65	21.2	77.342
	5	砕片	〃	1.0	1.0	3.1	0.25	77.094
	6	フレイク	安山岩	5.08	4.19	1.7	42.75	77.359
37	7	使用痕ある剥片	黒色黒曜石	3.65	2.4	0.75	6.8	77.03
	8	フレイク	〃	1.9	2.0	0.25	0.9	76.963
	9	チップ	〃	1.3	1.27	0.21	0.3	76.992
	10	使用痕ある剥片	〃	2.45	1.87	0.5	1.75	76.877
	11	フレイク	安山岩	1.95	2.3	0.76	2.6	76.979
	12	チップ	黒色黒曜石	0.9	1.43	0.2	0.22	76.835
	13	チップ	安山岩	1.24	2.31	0.7	2.85	76.944
40	14	フレイク	黒色黒曜石	3.95	3.2	0.95	10.05	77.254
	15	チップ	安山岩	1.2	1.21	0.34	0.45	76.953
	16	チップ	黒色黒曜石	0.8	1.5	0.15	0.2	77.086
	17	フレイク	〃	2.85	4.1	1.02	10.7	77.268
	18	フレイク	〃	2.4	1.95	0.6	2.55	77.053
	19	フレイク	安山岩	5.65	4.97	1.65	49.35	77.116
	20	フレイク	黒色黒曜石	2.24	3.3	0.97	6.0	77.882
	21	フレイク	〃	1.05	3.15	0.45	1.35	76.92
41	22	フレイク	安山岩	5.5	3.45	0.9	18.9	76.799

Ⅲ　ま　と　め

今回の田川遺跡の範囲確認調査は，竜尾川地区県営圃場整備事業と埋蔵文化財との調整を図る基礎資料を得るために行ったものである。その結果，３地点で保存の比較的良好な石器群を確認することができた。よって，今後の圃場整備事業は計画の段階で充分なる協議を行うことが必要となってきた。

調査範囲のうち最も北側のＡ地点では，10トレンチ３層より両側縁に細調整であるブランティング加工を施した台形石器があった。この資料は現段階で設定された型式に属していない。本来なら旧石器時代の包含層が存在していたのかもしれない。今後の問題点としたい。12トレンチ３層から尖頭器と比較的大形の石鏃脚部が出土している。尖頭器は多久市三年山・茶園原遺跡で存在を明らかにし，近年では良好な資料が得られている。同様の石器は東彼杵郡松山Ａ遺跡，野田の久保遺跡でも出土しており，時期的には早期の土器が少ないが縄文早期頃に比定されている。本資料も同様な時期が考えられるのではないだろうか。

西側のＢ地点は，18トレンチ１箇所のみではあるが，総数657点の遺物が出土し，特に剥片が367点と多い。そのうち縦長剥片は２層で26点，３層で23点あったが大部分は不定形剥片である。石核は20点あるが良好な縦長剥片石核は認められない。石鏃と剥片鏃では３層において剥片鏃が主体をしめており，中でも側縁あるいは表面に２次加工をしたものがあり，主体となっていることを裏づける。剥片鏃は西九州を中心として多くの遺跡から出土しており，柄を用い刺突具として使用される場合がある。しかし，本遺跡出土の剥片鏃はその立地からみて，このような利用法ではなくむしろ狩猟具とともに利用された可能性もある。また，石器やその製作方法が海岸部の集落，黒曜石原産地との強い影響をうけていることは，生業の多様性や交易を示す資料として評価すべきだろう。剥片鏃は時期的には中期からはじまり，後期をピークに晩期に至るようであるが土器の出土が少なく有文土器では前期曽畑式に似ている資料が１点あるのみで今の段階では中期としておきたい。今後の検討課題としたい。これらの遺物は他所からの流れ込みなどによる二次堆積が考えられよう。しかし，ローリングを受けた遺物が比較的少なく，遠方からの流れ込みによるものとは考え難いため第３図の範囲と考えてみた。

調査範囲の中央部であるＣ地点は厚い堆積物が検出されたがその分布は狭く，遺物垂直分布を検討すると単一生活面と考えられる。しかし，接合資料もなく旧石器文化期の所産と考えられる資料が少なく，明確でない。ある一定の短期間に利用されたキャンプサイト的な遺跡と考えられる。

PLATES

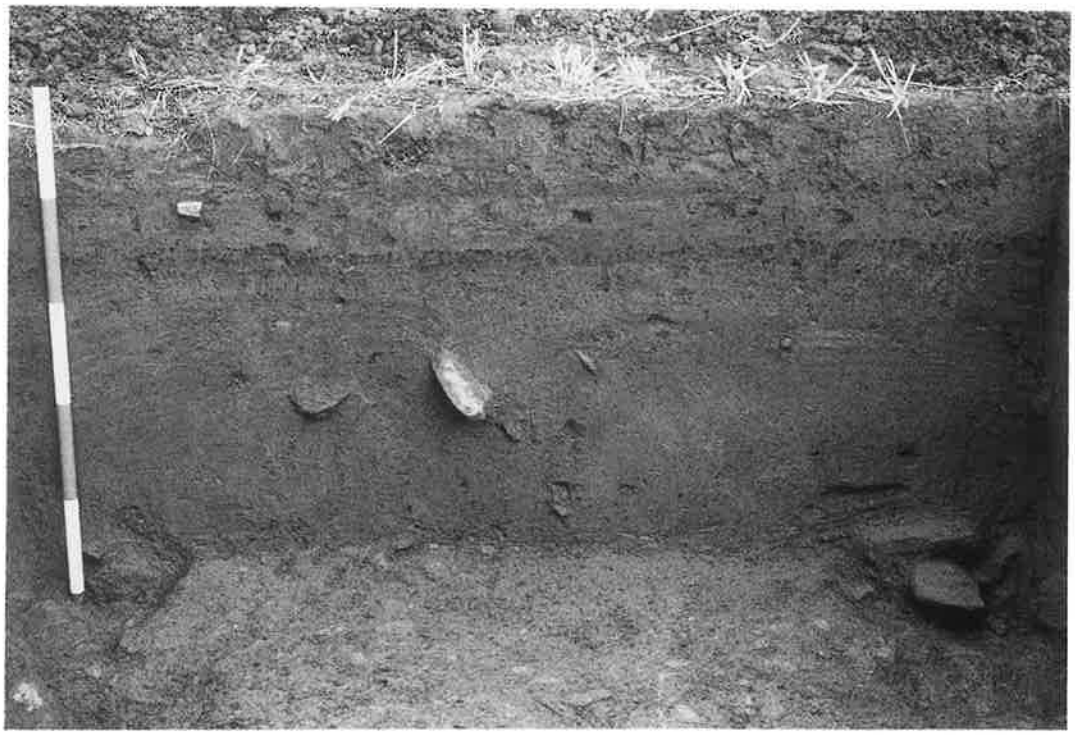
遺跡遠景（調査前）

A地点遠景

B・C地点遠景

12トレンチ東壁土層

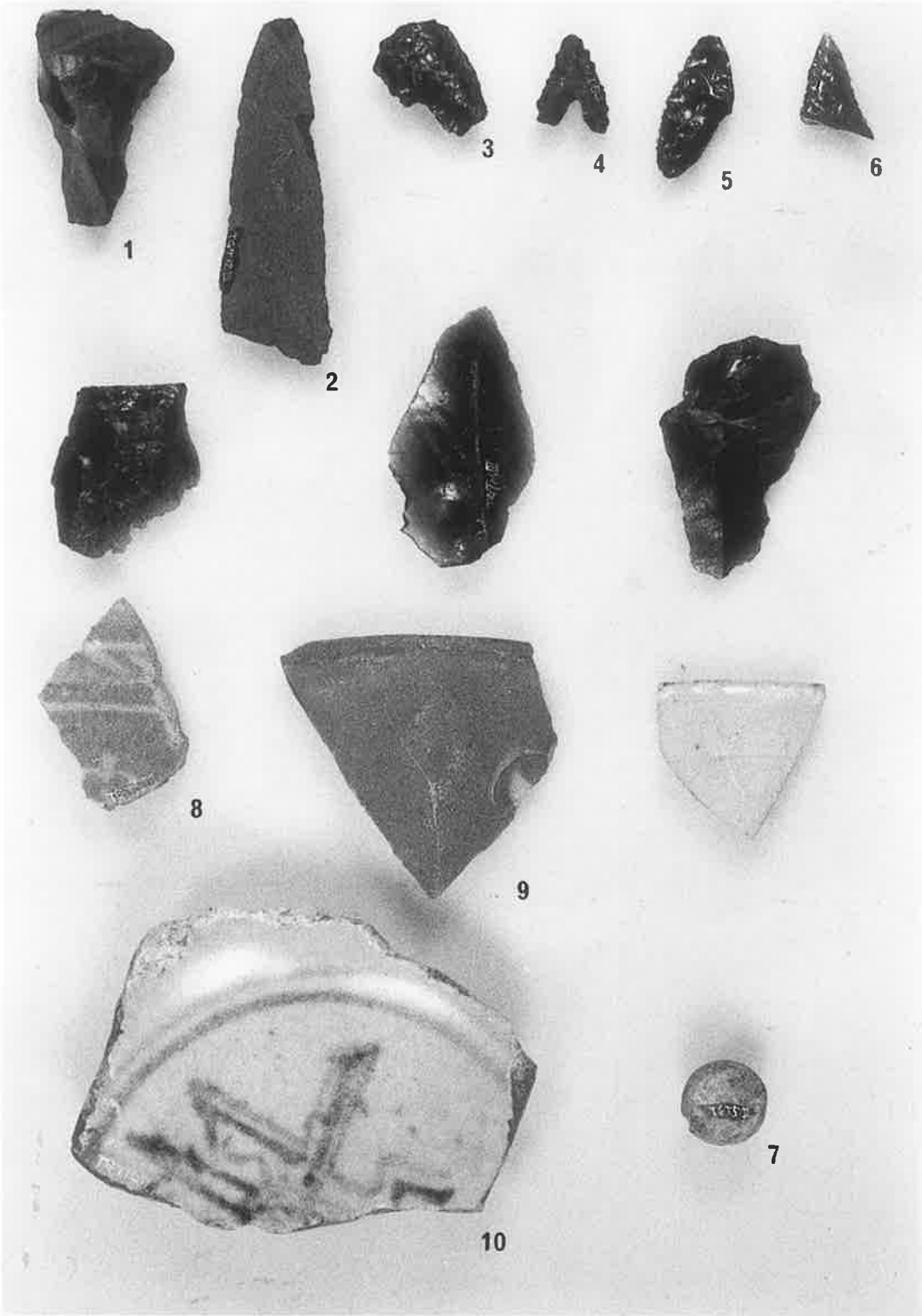
18トレンチ東壁土層



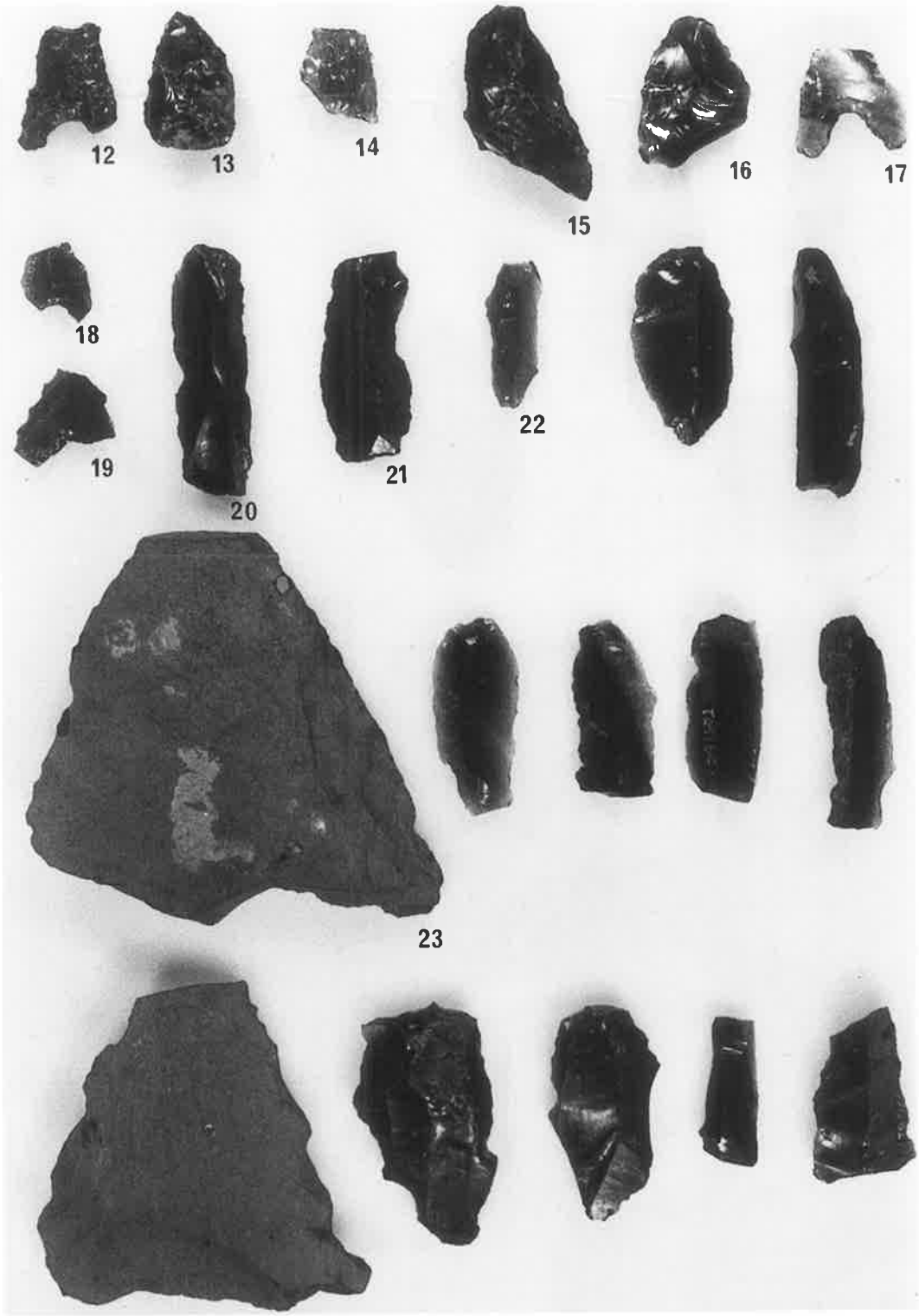
17トレンチ東壁土層

14トレンチ落ち込み検出状況

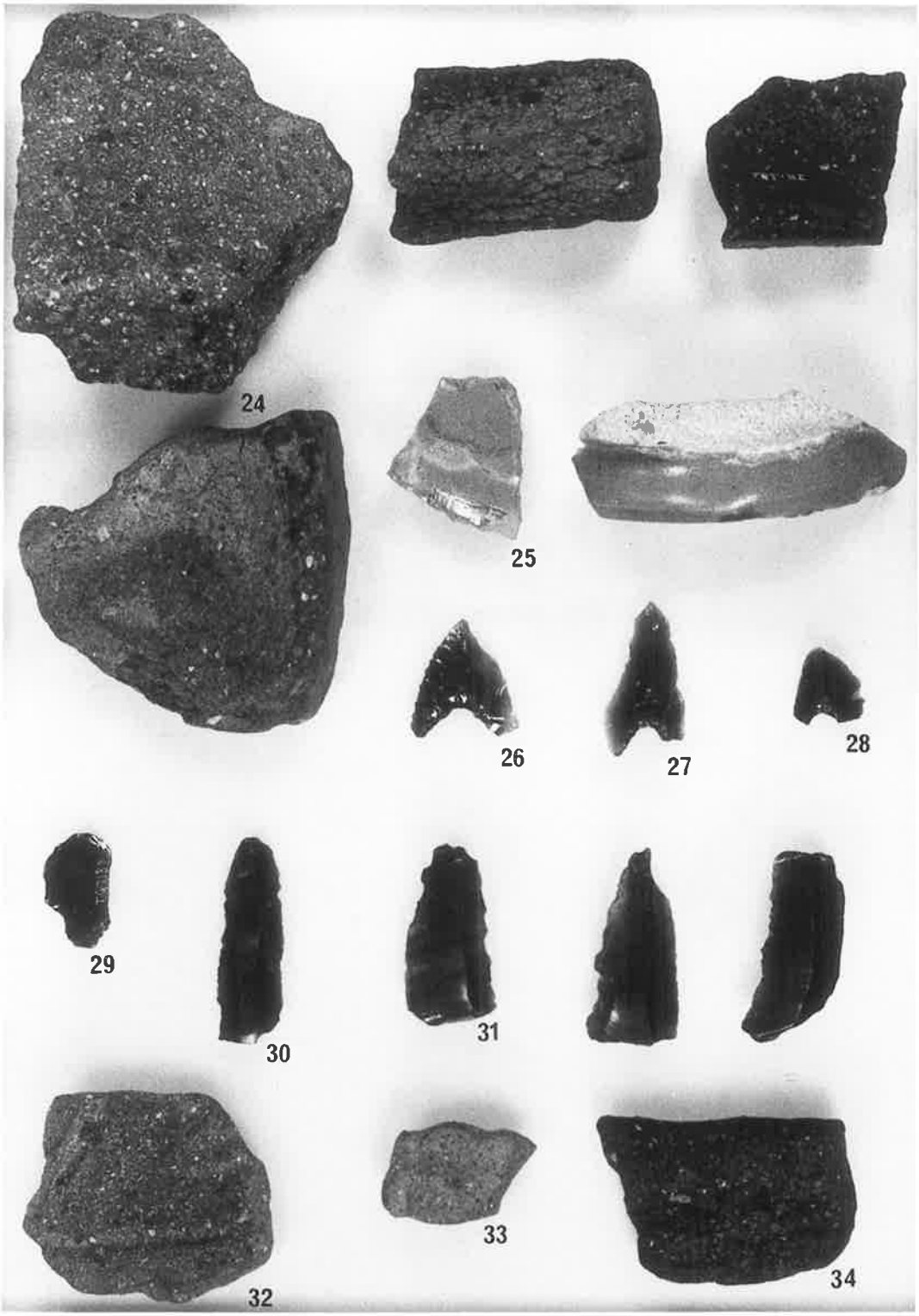
17トレンチ落ち込み検出状況



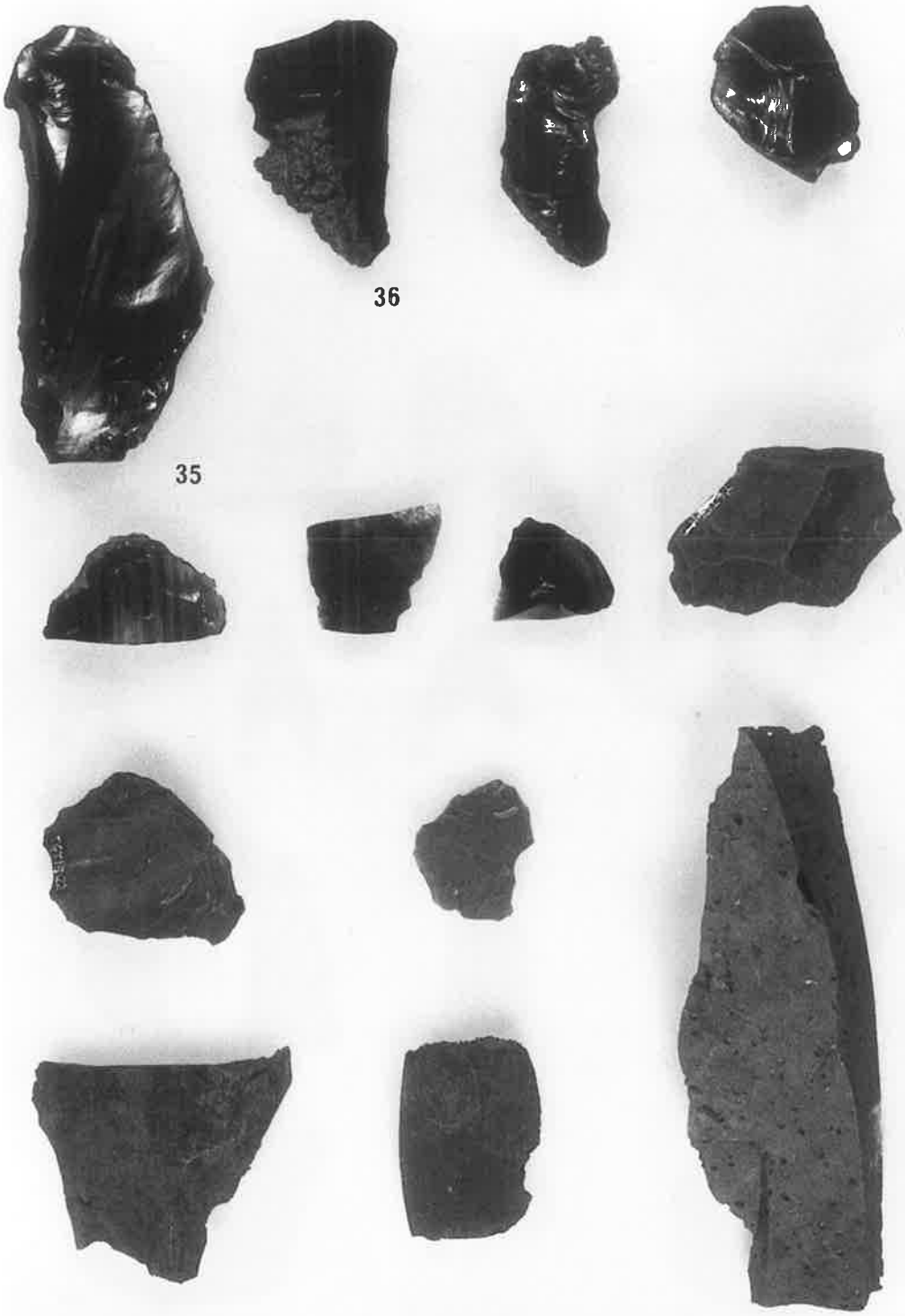
A地点出土遺物(1/1)



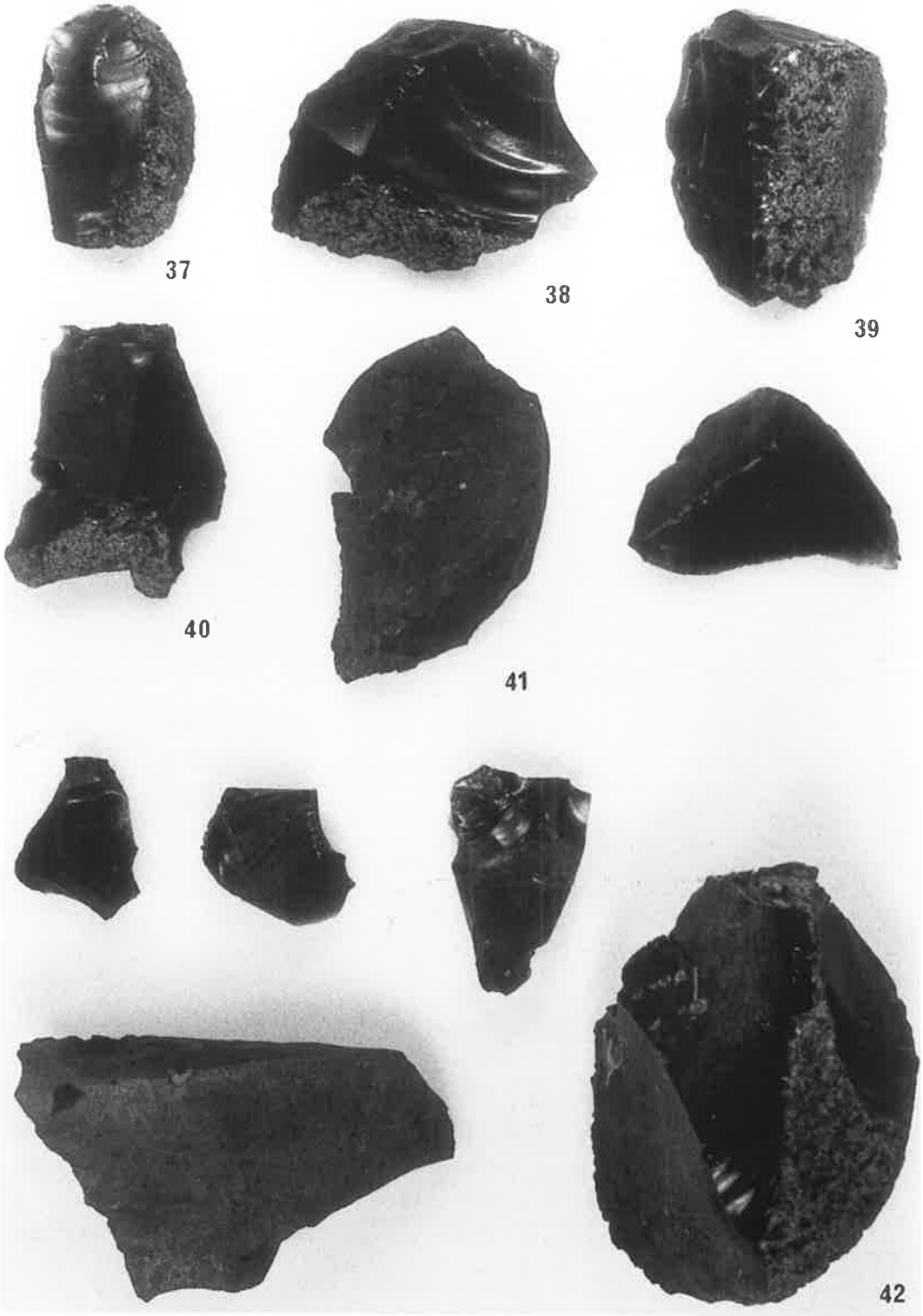
B地点出土遺物(1)(1/1)



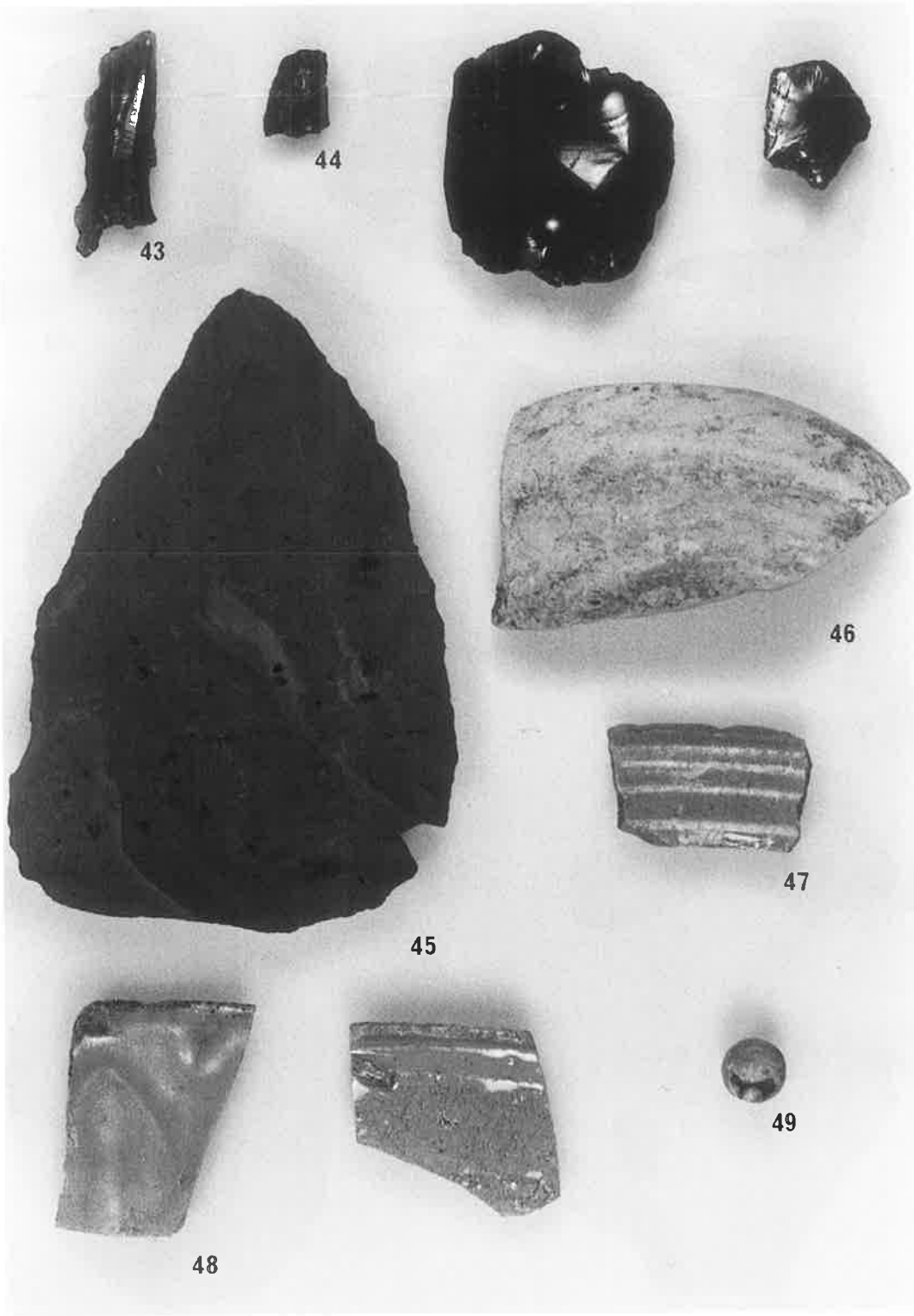
B地点出土遺物(2)(1/1)



15トレンチ出土遺物（1/1）



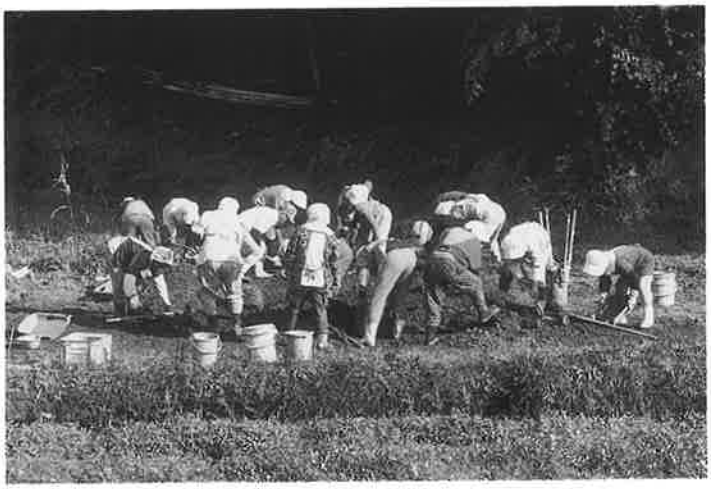
17トレンチ出土遺物（1/1）



その他の遺物（1/1）

遺物出土状況

遺物出土状況



調査風景

松浦市文化財調査報告書　第９集
田　川　遺　跡
平成３年３月31日 発行

発　行　松浦市教育委員会
長崎県松浦市志佐町里免365
印　刷　㈲エスケイ印刷